



SDGsでまちの未来を描く③

慶応大学大学院特任助教

高木超

前回は、持続可能開発目標(SDGs)を理解するために、「バックキヤスティング」と呼ばれる特徴について紹介した。今回は、さらに「インターリンケージ」と呼ばれる特徴について紹介しよう。

SDGsで掲げられた17の目標は、一見すると「貧困」や「気候変動」といった分野ごとに整理される、それぞれが独立しているように見える。しかし、現実世界と同じように、それぞれの目標は相互に関連し合っている。

例えば、誰もが安価に、そして公平に利用できる道路を整備することはSDGsのゴール9「産業と技術革新の基盤をつくろう」の達成に貢献する施策である。それだけで

インターリンケージとは

はなく、道路が整備されただけで、観光地としてにぎわうようになればゴール8「働きがいも経済成長も」の達成にも貢献する。これは相乗効果(シナジー)の例である。

一方で、道路を建設する際に森林を切り開いたことで、生物多様性にも影響が及ぶなど、ゴール15「森の豊かさを守ろう」の達成を後退させることも想定される。こうした負の影響はトレード・オフと呼ばれる。このように、施策の実施によって一つのSDGsのゴールが達成されるだけでなく、それを皮切りにして、まるでドミノ倒しのように他のゴールの達成にも影響が及ぶことがある。こうした相互のつながりを「インターリンケージ」と呼んでいる。SDGsの観点から政策や施策を考える際には、17の目標を点検ツールのように用いて、その影響が及ぼす正負の影響を整理してほしい。できるだけ多くの相乗効果を生み出して課題の同時解決を図り、かつトレード・オフを最小限にとどめることが求められる。これも想定される。こうした俯瞰的な検討を行うことで、自治体の政策や施策の質を向上させる機会にもなるため、自治体にとってもSDGsの活用はメリットがあるだけでなく、言葉よう。

次回は、こうした特徴を持つSDGsに資する政策・施策とは一体どのようなものか考えていき